●8月選評　　小島なお

・山岡　洋子（兵庫県）

私ごと全て溶かして
アスファルト
横断歩道は
チャームポイント

真夏のアスファルトは車を、ビルを、街路樹を、街ごと溶かしてゆく。溶け出して、薄く引き延ばされた私の自意識は、横断歩道の白さをきらきらひけらかす。

・来栖　優（宮城県）

茶毘に臥す唯々諾々を
素麺へと紫蘇を刻みつつ
夕映え
夕映え
夕映え、

死者を葬ることの手順には、逡巡の余地がない。唯々諾々と、素麺の薬味は刻まれ、夕映えには感傷せざるを得ない。「茶毘に付す」ではなく「臥す」の意図は。

・風船（東京都）

自由猫　台風の中　何処にいる

自由猫を野良猫ではなく、幻の猫と解釈してもいい。風雨の隙間を自在に飛びまわり、伸び縮みする自由猫。彼らは何処にでもいるし、何処にもいない。

・茶和鈴（東京都）

夕べの花火は

ＯＫなの？ＮＧなの？

本棚に潜む猫
お腹を見せている

ＯＫの花火とＮＧの花火。いずれの可能性をふっくらと孕みつつ、その柔らかい腹や毛並みで沈思黙考する私の家のシュレディンガーの猫。

・植村　日向（愛知県）

本棚に寄り集まってわたしたち
仲良くしようね　地震が来るまで

知識を共有し、共同認識を持つことは私たちを幸福にする。本というゆたかな知をともに享受し、死の運命まで共有できたら、そこはユートピアになる。

・水木貴奈子（神奈川県）

カラスは跳ぶ跳ぶ、林。
長方形を
ちらかしながら。

カラスの飛び散らかしてゆく光と影と存在の長方形。私たちはその図形から、何も受け取ることができない。意味や解釈を振り切って、翼を持つものは消える。

・小野寺　里穂（東京都）

再演しといて、いま、ここ、滅亡

「この世は舞台」と言ったのはシェイクスピアだが、であれば、人気の舞台は再演だってありえるのだ。救いようのない滅亡は、あるいは再演への演出となる。

・永山　逢海（神奈川県）

風鈴のちりーんの
んが融けた時
あなたに何か言うべきですか

「ん」が溶けると、風鈴の音の終わりがなくなってしまう。どこまでも伸びてゆく永久の鈴の音のなかで、たぶん私はあなたに何も言わない。

・夢眠（東京都）

似合わない
派手な下着をつけてきて
右の乳首を溶かすことわざ

肉体はもっと簡単に扱っていいし、もてあそんでいい。派手な下着は私の肉体の違和を露わにして、この世の常套文句で瞬時に消し去ってしまう。

・羚（新潟県）

汗ばんだシャツ、
モブAの私があなたになるとこ、
ぜんぶ見ててね

モブでしかなかった私があなたになるまでの過程。それはあなたをを強く、寂しく思い続け、思い切るまでの歳月のこと。世界はモブによるモブたちの物語だ。